

広報 Koho Gallery
展示室

第4回

浮世絵ってなんだ？展Ⅱより

つきおかよとしし つきひやくし
月岡芳年 「月百姿 源氏夕顔巻」

世の中には「浮世絵？…そんな高尚なもの、わからないよ。」という方も多いようですが、浮世絵というのは本来、庶民のもの。しかし、現代人からすれば、江戸時代の文化や時代背景を知らないと、どうもまひとつ理解ができない場合があるのも確かです。そこで、技術から浮世絵を楽しんでみるのはいかがでしょう。今回はそのような切り口で月岡

芳年（1839～92）の「月百姿 源氏夕顔巻」をご紹介します。

夕顔は光源氏に愛されたがために呪い殺される悲運の女性。白い夕顔の花が満月の光に照らし出されるなか、ひっそりとたたずむ夕顔の幽霊が描かれています。透き通る身体の、そのはかなげな存在感は、細かな彫りと薄い色彩の丁寧な摺りで表現されています。画面右下に小さく「山本刀」と記されているのは彫師（山本栄三、または信司か）の名前です。

明治期に入ると、版画も細い筆で描いたような繊細な線で表現されることが求められました。本図もそうした時代の好みに適った作品ですが、特筆したいのは、夕顔の花びらの部分に施された摺りです。色を使用せず、版木を強く和紙に押しつけることで紙の表面に凹凸をつけ、模様や物の立体感を表現する技法（空摺という）です。残念ながら写真ではなかなかわかりにくく、現物を見なければこの面白さは伝わらないのかもしれませんが、展示室で浮世絵版画をちょっと下から覗いてみると、たちどころに照明に照らされて紙の凹凸があらわれます。1枚の版画のなかには、職人たちの技術の粋が尽くされています。絵師とは違い、彼らのほとんどは経歴どころか名前さえ知られていません。しかし、彼らが遺した仕事をみると、浮世絵版画という庶民文化が、彼らのような職人たちの技によって支えられていたことを実感するのは、



月岡芳年 「月百姿 源氏夕顔巻」
大判 明治19年(1886) 当館蔵



部分拡大図
花びらのしわが空摺りで表現されている。

※本作品は2月12日(日)まで那珂川町馬頭広重美術館で開催の「浮世絵の基礎知識 浮世絵ってなんだ？展Ⅱ」に出品されます。

(学芸員 津田卓子)

「下野教育美術展」
幼稚園・保育園の部金賞

那珂川町小川第2保育園の園児2人が県内約1万5千点の応募作品の中から年少と年長の部で金賞を受賞。

その作品をミニギャラリーに掲載しました。

うんどうかいたのしかったね
川井 真子ちゃん
(小川第2保育園)



ミニ
ギャラリー



かっこいいライオン
西嶋 華規ちゃん
(小川第2保育園)